様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５　年　６月　１７日現在

機関番号：３４５１１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2012
課題番号：20520193
研究課題名（和文）　婦人雑誌にみる文学・ジェンダー・メディアの交差
—藤村「処女地」執筆者調査より—
研究課題名（英文）　Intersection of Literature, Gender and Media, seen in Women's Magazines—Based on the Research on the Contributors to "The Shojochi" Published by Shimazaki Touson—
研究代表者　永渕　朋枝　（NAGAFUCHI　TOMOE）
神戸女子大学・文学部・教授
研究者番号：00294273

研究成果の概要（和文）：
「処女地」（1922・4～1923・1）は島崎藤村が創刊した婦人雑誌である。この雑誌に執筆した女性達が他のどのような雑誌に執筆していたのかを調査し、以下の３点を明らかにした。第一に、「処女地」は執筆者達が後続の婦人雑誌や一般の新聞や週刊誌などに書くための人脈をつくる場となったこと。第二に、女性達にとって書くことは〈私が私になること〉であったこと。第三に、従来論とは異なり、「処女地」は一定の評価を得、作家を育成していたこと。これらの事実から、文学とジェンダーとメディアとの密接な関係の様相が見えてきた。

研究成果の概要（英文）：
"The Shojochi"(April 1922～June 1923) is the women's magazine published by Shimazaki Touson. I revealed the following three points by researching what magazines the women wrote for, who contributed to "The Shojochi". First, "The Shojochi" became a place where the contributors developed relationship which was necessary to write for women's magazines, general newspapers or general weekly magazines after "The Shojochi ". Second, they thought that writing made their identity. Third, unlike previous view, "The Shojochi" was considerably appreciated, and brought up contributors to established authors. These facts showed an aspect of close connection between literature, gender, and media.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
2009 年度	600,000	180,000	780,000
2010 年度	700,000	210,000	910,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
2012 年度	500,000	150,000	650,000
総　計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・日本文学
キーワード：近現代文学・メディア・ジェンダー・国文学・島崎藤村

１．研究開始当初の背景
(1)　婦人雑誌の復刻や目次の刊行を受けて、婦人雑誌研究の機運が高まり、「青鞜」、「女人芸術」等、個々の雑誌について研究成果（尾形明子『女人芸術の人びと』ドメス出版 1981 等）が発表される中で、婦人

雑誌間のつながりを探ろうとする試みは手薄であった。

(2)　このような研究動向の中で、同一執筆者群の追跡から、婦人雑誌間のつながりを浮き彫りにできると考えたが、膨大な執筆者達を追跡調査することは不可能である。そこで、①生田花世らによって婦人雑誌の中に確かな位置づけを与えられており、②私自身のこれまでの藤村研究を踏まえた研究ができ、③作家、教育者、画家、詩人、文学研究者、さらにはただ自己の思いを表現したい女性達等、藤村という共通項を持ちながらも、幅広い執筆者群が集まった「処女地」に着目した。

(3)　「処女地」は、『新生』発表の数年後、藤村が「婦人の眼ざめを期待して」創刊した雑誌である。藤村が手助けした他は、すべて女性達の手になる。婦人文芸雑誌としては「青鞜」(1911～16) と「女人芸術」(1928～32) のほぼ中間に発行されている。「処女地」についての先行研究は多くはなく、「処女地」執筆者は、鷹野つぎ以外ほぼ無名と論じられ、藤村の妻になった島崎静子が知られている程度であった。近年の、紅野謙介「女性作家とメディア――『処女地』のひとびと」(『日本女性文学大事典』日本図書センター 2006) 等も、「処女地」一誌の中に女性の自己表象を探ったものであった。

(4)　そこでまず、①「藤村『処女地』に執筆した無名の女性達・目録」(「神女大国文」2007) において、『日本近代文学大事典』(講談社　1977～78) 等に項目が立てられていない 32 名の執筆目録を作成した。それから②項目の立てられている 11 名のうち「『処女地』に執筆した女性作家達(一)――生田花世、池田小菊、川島つゆ、澤ゆき」(「神女大国文」2008) において、4 人の主に著書について調査した。これらによって、「処女地」の執筆者が他誌にも数多く書いていることが判明した。そして執筆追跡調査から婦人雑誌の系譜をはじめ、文学・ジェンダー・メディアに関する多くの知見が得られるという見通しを持った。

２．研究の目的

本研究は、藤村創刊の婦人雑誌「処女地」に執筆した女性達が、どのような人達なのか、どの雑誌にどのような文章を発表したのかという調査を切り口として、新聞雑誌間、殊に婦人雑誌間のつながりを明らかかする。それと共に、女性の自己表現の意味を探り、雑誌「処女地」と藤村とを再検討することを目的とする。

これらによって、並列的に進んできている個々の雑誌研究に見通しを与え、文学研究とジェンダー研究とメディア研究の交差する領域を開拓することをめざす。

1.　研究の方法

毎年発行され続ける新聞雑誌のデータベース(『DVD-ROM 版　精選近代文芸雑誌集総目次』雄松堂書店　2011 等) を加え、索引や目次等の調査をまず行う。さらに、文献複写依頼や各地の図書館に出向く調査によって、原紙・原誌による確認を行う。この執筆調査を手がかりに、以下の作業や考察を行うことによって、本研究を進める。

(1)　「処女地」に執筆した女性達の執筆調査、目録作成

(2)　「処女地」執筆者における「処女地」の意味の解明

(3)　当時のメディアにおける「処女地」の位置づけ

(4)　婦人雑誌をはじめとする当時の新聞雑誌間のつながりの解明

(5)　藤村の全集未収資料発掘とその考察

４．研究成果

(1)　「処女地」に執筆した女性達の執筆調査、目録作成

「処女地」執筆者のうち、文学事典等に項目の立てられている 11 名の女性作家(以下「作家」と記す) は、生田花世、池田小菊、川島つゆ、澤ゆき、加藤みどり、島崎静子、鷹野つぎ、若杉鳥子、細川武子、正宗乙未、若山喜志子である。澤ゆき迄の４人に加えて、加藤みどり以下の作家について、略歴・作品や同時代批評・作家における「処女地」の位置づけ等をまとめた。

また、文学事典等に項目のない無名の執筆者について、執筆目録等を補訂した。そして「処女地」編集実務の経歴を買われて「女人芸術」編集長になった素川絹子についてまとめた。

これらから、以下のことを明らかにした。

①　11 名の作家中、生田花世、加藤みどり、鷹野つぎ、若杉鳥子、若山喜志子の５名が河井酔茗編集主任の「女子文壇」で活躍していた。「女子文壇」が女性作家育成に果たした役割の大きさがわかる。同時に、女性達が複数の雑誌や会に参加して切磋琢磨していたことも明らかになった。細川武子のように沼田笠峰が指導した「たかね」で育った作家もいた。

②　11 名のうち、東京生まれの細川武子・川島つゆ・島崎静子の３名と奈良女高師附属小学校訓導をつとめた池田小菊以外の７名は、文学を志し、親を説得あるいは家出して上京した。彼女達にとって書くことは〈私が私になること〉であったらしい。

③　次々と新しく出る新聞雑誌のデー

タベースを使った調査の中で、「処女地」の女性作家達は当初予想したよりも膨大な量の執筆をしていることが明らかになった。

その中で、文学事典に項目はあるが、評伝や執筆目録がまとめられていない３人の執筆目録を作成した。女学校副校長や幼稚園長をつとめ、放送童話や少女小説を執筆した細川武子、小説家として認められながら執筆の途絶えた正宗乙未（正宗白鳥の妹）、藤村と結婚し、主に藤村の没後に執筆した島崎静子の執筆目録である。そこから、大正時代（1910年代）から作品を発表し始めた女性達が辿った道筋を見ることができる。

④　「処女地」の執筆者にはブルジョアの主婦が多いと通説とは異なり、若い未婚者が多い。１割は在学中である。既婚者は約４割、そのうちの８割は核家族である。また、６割強が高等女学校卒業よりも在学年数の長い高学歴の女性達であり、そうでない女性達も進学希望の強かったことを書いている。

(2)　「処女地」執筆者における「処女地」の意味の解明

①　女性の発表機関の少ない当時、「処女地」は作家達に文学的成長の場、書き続ける場を与えて、その後の文学生活の進展に寄与した。

たとえば、鷹野つぎにとって「処女地」は作家生活の土台を築いた発表舞台であり、若杉鳥子にとってはプロレタリア作家になる契機となる作品を掲載した場であった。投書雑誌「文章世界」等に短歌・俳句・詩を発表していた河井稲子、正宗乙未らは「処女地」から小説を書き始めた。

②　「処女地」は、結婚生活に入るよりも学ぼうとし、結婚後も書こうとした女性達に発表と成長の場を与えた。

(3)　当時のメディアにおける「処女地」の位置づけ

①　従来、「処女地」に対する世評は苛酷であったと論じられてきた。しかし、「処女地」は当時の新聞雑誌において時機を得た企てと見られ、作品は女学校の教科書等にも掲載されていた。

②　「処女地」は従来論じられてきたように女性達の教養を高めただけで終わったのではなく、作家育成という点でむしろ一定の成果をあげたといえる。

藤村は後年、応募小説の選者として「処女地」同人の作品を選ぶこともあった。

③　「処女地」は女性達の人脈や連帯をつくり、それが後続する雑誌につながることによって、女性文芸誌の流れの中に位置づけられるものとなった。

(4)　婦人雑誌をはじめとする当時の新聞雑誌間のつながりの解明

「処女地」に執筆した女性達のうち５人以上が執筆した雑誌における、彼女達の文章の掲載状況表を作成し、当時の新聞雑誌のつながりとメディアの様相を解明した。

①「処女地」執筆者の作品は婦人雑誌ばかりでなく、「東京朝日新聞」「読売新聞」「週刊朝日」「サンデー毎日」などの一般紙誌にも相当掲載されていた。

②　女性達には男性と同じく投書時代を経て文学の道に進んだ人がかなりいる。「処女地」の執筆者達は「女性改造」や「婦人公論」に執筆した。彼女たちは婦人文芸雑誌「若草」や「女性」で認められ、長谷川時雨主宰の「女人芸術」に参集した。神近市子の「婦人文芸」や、婦人解放を目指す「婦人」や「婦選」も作品を掲載した。

③　大きく、「女子文壇」→「処女地」→「女人芸術」という婦人雑誌の系譜が明らかになった。

「女子文壇」に書いた女性達が誘いあって「処女地」に参加したり、「処女地」に書いた生田花世が「女人芸術」に参加勧誘したりしていた。素川絹子は「処女地」と「女人芸術」の編集をつとめた。婦人雑誌の系譜が、人脈によってつくられていくことがわかる。

④　しかしながら雑誌は、人脈によるつながり以前に、雑誌は社会情況や読者の関心に左右されることもわかった。「処女地」終刊後、相当数の執筆者達が活躍した改造社の高級雑誌「女性改造」は、読者を獲得できず早々に廃刊になり、「婦人公論」は大衆路線に切り替えた。

⑤　商業的婦人雑誌「女学世界」「婦人画報」「婦人世界」「婦女界」「婦人倶楽部」にも「処女地」執筆者の文章は掲載されたが、そこでの関心は女性作家の文学よりも生活自体にあった。

(5)　藤村の全集未収資料発掘とその考察

「処女地」執筆者の執筆追跡調査の過程で藤村の新資料を大量に発掘した。それらから、『藤村全集』所収の感想集・童話集の初出、『藤村全集』の誤りについて整理し、考察を行った。

当初の研究計画では、『藤村全集』未収資料の紹介とそこからの藤村の再検討も行う予定であったが、発掘できる全集未収資料は膨大な量にのぼることが判明した。そのため、これに関わる研究は「全集未収資料集の作成による藤村研究の再構築」（基盤研究（C）（一般）2013～17）として、新たに別に行うことになった。

(6)　婦人雑誌の祖といわれる「女学雑誌」掲載の北村透谷「鬼心非鬼心」を論じた。「鬼心非鬼心」は、実際に起きた母親による子殺し事件を取り上げ、貧困のみならず、人間を衝き動かす〈魔〉をつくり出すことまでを「社会の罪」であると主張する。「鬼心非鬼心」は、「処女地」の女性達の作品を相対化し、子殺しの母親に対する「処女地」の作家達の社会的位置をも相対化する。

５．主な発表論文等
（研究代表者には下線）

〔雑誌論文〕（計８件）

① 永渕朋枝、「『藤村全集』の訂正と書誌的問題点」、「神女大国文」、査読無、第 24 号、2013 年、91-107 頁

② 永渕朋枝、「『藤村全集』感想集、童話集の初出」、「島崎藤村研究」、査読有、第 40 号、2012 年、78-88 頁

③ 永渕朋枝、「執筆目録――細川武子、正宗乙未、島崎静子」、「神女大国文」、査読無、第 23 号、2012 年、19-34 頁

④ 永渕朋枝、「藤村発行の婦人雑誌『処女地』の位置――女性が書く意味」、「叙説」、査読有、第 38 号、2011 年、46-61 頁
http://hdl.handle.net/10935/2840

⑤ 永渕朋枝、「藤村『処女地』の執筆者――補遺、素川絹子」、「神女大国文」、査読無、第 22 号、2011 年、33-48 頁

⑥ 永渕朋枝、「藤村『処女地』に執筆した女性作家達（三）――細川武子、辻村乙未、若山喜志子」、「神女大国文」、査読無、第 21 号、2010 年、59-75 頁

⑦ 永渕朋枝、「明治の子殺し―――北村透谷「鬼心非鬼心」における〈社会〉と〈魔〉」、「日本近代文学」、査読有、第 81 集、2009 年、1-17 頁

⑧ 永渕朋枝、「藤村『処女地』に執筆した女性作家達（二）――加藤みどり、島崎静子、鷹野つぎ、若杉鳥子」、「神女大国文」、査読無、第 20 号、2009 年、14-30 頁（『国文学年次別論文集』に収録）

「神女大国文」掲載論文は
http://lib.yg.kobe-wu.ac.jp/meta-bin/mt-pmtlist.cgi　にて公開。

〔学会発表〕（計３件）

① 永渕朋枝、「発表誌から見る島崎藤村と『処女地』執筆者」、近代文学研究会、2012 年９月 15 日、京都府立大学

② 永渕朋枝、「藤村『処女地』の位置」、島崎藤村学会全国大会、2010 年９月 25 日、安曇野市穂高会館

③ 永渕朋枝、「透谷『鬼心非鬼心』の時代」、北村透谷研究会全国大会、2008 年６月７日、キャンパスプラザ京都

６．研究組織
(1)研究代表者
永渕　朋枝（NAGAFUCHI TOMOE）
神戸女子大学・文学部・教授
研究者番号：00294273